



東 櫛 子



三

服部文庫

117

63

3



東牖子卷之二



東牖子卷之二
 人乃性之實に稟白たる君子國たる清土の人れ及
 處に泥泥たることらけいむ神明又媚々然るも也く
 凡々あつてもどなり鑿案方書の類とんる小房粥乃
 去藥とん病と記者有て主作術を楊理驗あり一方
 と著との許多出やりそしむる人々て何種妻妾の
 美に富みたる人々も愚頑なりをそく病と求るる人々
 者有るを望むる奥に今を以て俗同よゝるが如く
 一條とん糸半を計り知る飲食男女の道大欲なとれど之

○孔孟の道と云ふ者も聖人聖人の言分つても云ふに
たまたま詩文の才ありといふ博識強固の才ありといふも
云々一致の君子稀く和欽と云ひて貫之船恒の域なき
書と云ひて義之松雪の世界遠りいふ全道のそれなり
りやと云ふ純然技と云ひては後編理小方と縁のそれい
勤心師と勝者出づといふ道のいふれと云ひたりをいふ
又七年十年寝食とも忘るて博古の功を積みし師と
及し能くかゝるやうに其の藝の中は此頃我々が流しと
流しと云ふやうに云ふと師と云ふと云ふと云ふと云ふ
自己獨立して容易く上達し出藍の徒多きや唯

いふれ技術のくやと達と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
流しとは道と云ふやうにその教令所通かーに上達する物
と流しとは道と云ふやうにその教令所通かーに上達する物
此感いふふても解ん
○茶道と云ふて和と云ふと懶母子の書並とーに今の流
流と和と和と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
人の避るたみらる

○誠信堂の法帖は唐人の書として茶書と云ふやう
漢のりや廣澤子の換發百澤ふも漢の和と云ふ
やがあ外の友近道と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

あり月寺へゆき紅くは清く席に臥し堂の法帖の法と
ねね唐人の書け法がたよりを法でし道法師のしこ
ろふ臥時堂の唐人乃書け百法海の内れ法なること直り
法より流石の法跡なりとそく是ねと道はねし
中物を次とねるるし廣澤の英邁の才に法がた
○舞妓の唱ふかりと焼といふるは深ありその節拍より
法有る鞭の之地は合り故に一曲乃圖る法拍よりとて法
ふの法よりねいふより同のふれ拍より切近も初終連続
あるに地は合ね紀州の人の節奏を法けしとて妙之支鞭乃
之地とに分損益の法よりて中拍よりとて唐老子秦川勝
ふ教ありし雅楽は原の拍子より九九の老湯の教と損益

ありし雅楽は原の拍子より九九の老湯の教と損益
ありし湯の五七合と十二音より是とて今の一と減く
八つあるに八つを十二との内割け打と兩張漏拍よりと
さ八つの内れ二に六の法教と省けは奇と偶の同拍拍よりと
大小鼓より打これを中地とて唐尺と称て番通の用る
法を尺式すの内八つを割付しもに分損益の法よりい
よりより年々寺の吟論図法則なる人より乱舞の法を
せしに分損益の半より及人法則不審せしと源曲よりと
分損益の法よりとねるるふより地改より一番の図
まで拍子を合せ見せしふ法則慨然とて雅楽の拍子

も是を少少とせしめてなり然らば妖瀉の山姥と雅楽の
律も叶つて能く相損益の澤々京師の儒生渤海の
編みたる秦曲に名聞せし書ありこれなまきりなり
瀟曲のな原をいふは蓋書の書なり玉蘭集の物なり
○京師より若狭小朝と称するものなりとて飯嶋のま
限る大さくならざるやとて浪の小朝とて朝の中に種
かり年作より用ふる對馬小朝とて常の朝のより小朝とて
依り風情とて別のものとは大に相違なりとて京師
小朝と称する物なり小朝のよりとて小朝から依り若狭の
人といふなり

○車の福とて七極たるもの之を画家は画法とてこれ
板の半より著るまでとて多きこと八は畫より然るは
画家よもの附くべからず此不愛の少湯七の教はほれ理
と有かつて能く鬼やが集の者七車とて一と別なり是を
とて多きをいふ車とて七はつとて多きこと七のむなり
といふより号なりとて此七を教ふこととて別なり
○軸とて力級の目行をいふ事能く人のいふこととて
唯てとて遠くものこととて主制をいふ事なり金にて
とて目行とてなるものなり是とて年々今も求むるもの
なりとてとて別なりとて別なりとて別なりとて別なり



千祿字書と見ざるは乃の身あをえて千祿字書の後部
 の顔面にて扱て利剣なり是を見ても日中紀の顔面乃
 とあると板系が新に家と云い侍より代り連歌の家通住
 せり故よたの元と新在家家通と稱しは未と今或清源と
 なりぬと須磨月師と住たりとせよと今と扱の一先
 蔵の標れは乃の家通月師とあり
 ○氏家を建つる大黒柱と云物有元来は柱より棟梁を
 定むるも大黒柱なりと古来名の心なりと云
 今和州の工通の中は未と云は次と云と小黒柱と云は一向
 如くはなり

○透棚袋棚といふ物今世に潜して氏同と改てる家あり
 元来透棚と月と客の家は透棚と物なり客有ては堂ふ
 入来のし客乃冠と上の棚は並駕帽子下の棚は並り
 ぬふ透棚と物なりや袋棚といふも又思ふなりと云ふ
 物をのり棚と金枝玉葉の止んぐと云ふと清殿は透棚
 とのしと云ふ客の清殿はと云ふと綿の囊と云ふと紙を
 のり袋と云ふとそれと云ふ所のしと清殿は載て清殿あり
 と改て一方は袋と改てなりと改て袋棚と入るなりと云ふ
 故に冠駕帽子の棚より袋棚と云ふなりと菊橋清殿の
 南殿の階上の極なりと二方生きたれと云ふなりと云ふ

らう、波は更方などとして、板足利家系初め御所をさす
 まうより云々、恨で透棚袋杣をあくる武家達、
 より、終は惜して氏間を殺るゝといひ、半さや袋棚の書画の
 袖物と白砂糠の相借、
 此れ並に交へて、
 このの、
 ろしを、
 一が、
 今や、

けいふてい

式部銀盃袋柵の制有と志師宗匠よして補注せし
 とのそつたは、
 内りりしや勿論中堂の袋柵とい同名異物なり
 多田南嶺これを見でていり獨会膏膏の才子ふじど
 英雄人と歎くの渡のこゝに老後遺付と愛おせし
 一よう保老屋一杜撰なまや
 袋柵は血落し七壁添らぬ法有る尤も憚
 し有む家より次

○ 歳をが身とたどる方々の不仕合と云ふと瑞々清澄と

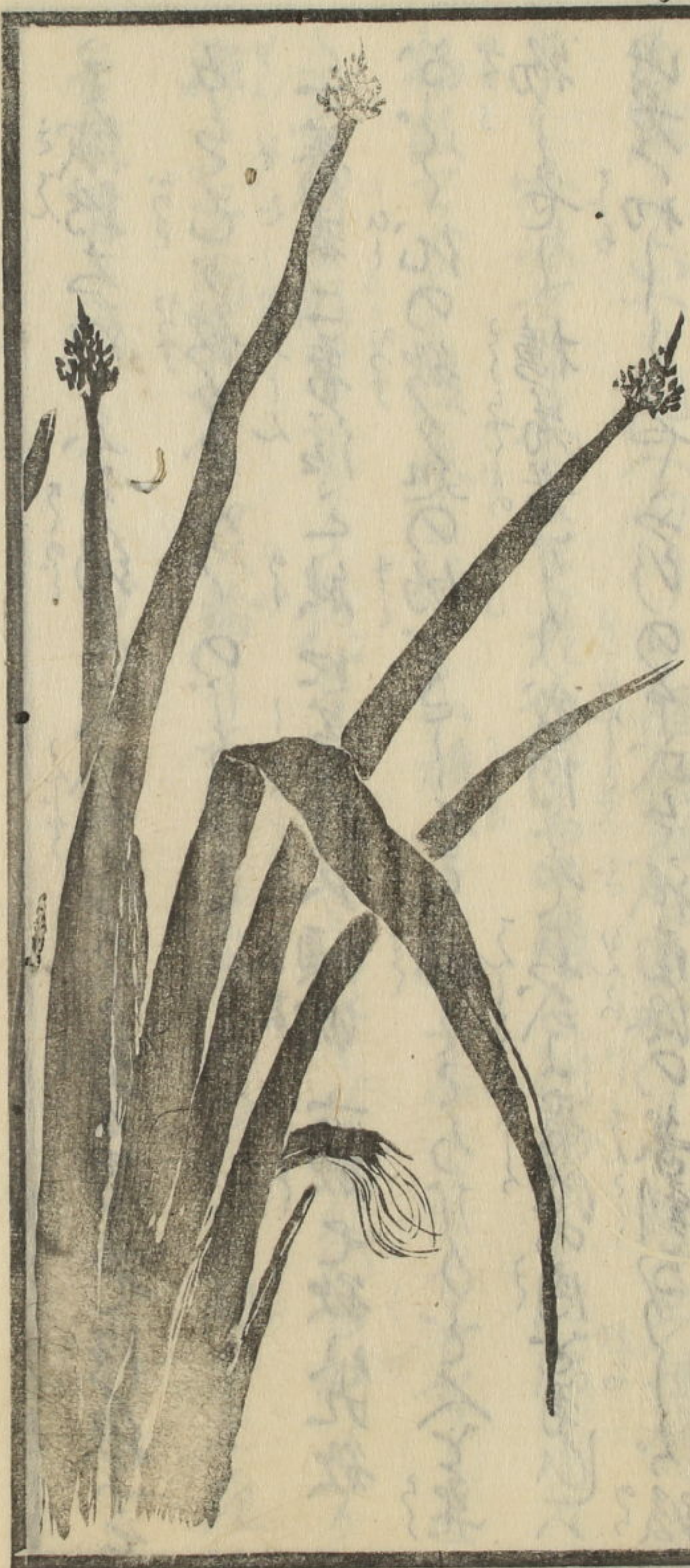
白附の集ふ再々せしより
 流布せり

なり 嶮 大坂之商賈 福漆 地之變也

と後門外之山の秘しそ

梅花之入心者

といふるを以て此の事候の事もよみて工風をせしむるが
 十人の此のれも秘せし事ゆゑに後をせしは法も止ねば
 茶中とすは席の中より初めのこれ強うこゑに其後秋
 至席といふ遊人ありは屋敷遊をよせしが遊学の博物なる
 しく吟味せし人かきた老人遊馬の頃と初席とに訪ししが
 物故せし後養又清く小舞又梅二本と云ふとせしと
 つと碑は彫けしなりこれとて初と終とが梅の花の白解しなり
 渾とて同音なりゆに論して作在り其のたゞと同一と
 若日有光のくさしむりうりとのふたばうひとくさしと



李與龍画

縹の紗ぞうに淡黄の帽を花のうしと云ふ縹色
ふれどこれ縹の帽を紗ぞうなりと又淡黄の縹を
奪ふと云ふ今の紅紫の糸は又美しと云ふ書は紫の
糸は縹の糸に紅紫の糸を織り交ぜたり赤は紫の糸に
紅紫の糸を織り交ぜたり紅紫の糸を織り交ぜたり
と云ふ又紅紫赤と字を列ねて書たり紅紫赤の中に紫
と云ふと書たり是を考へていふ人の思ふ今の紅紫の
いろれどこれと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
のことも縹の糸に紅紫の糸を織り交ぜたり是を考へて
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○紅と云ふはひと云ふ元来の園より渡りて藍の種を
や又いふと云ふ葉を種と云ふ物の名と云ふと云ふと云ふ
いふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
云来れり又縹色種と云ふ縹色種と云ふ縹色種と云ふ
種と云ふ濃縹の種なり又二縹と云ふ二縹と云ふ二縹と
二縹と云ふ二縹と云ふ二縹と云ふ二縹と云ふ二縹と
縹葉と云ふ縹葉と云ふ縹葉と云ふ縹葉と云ふ縹葉と
二縹の縹と云ふ二縹の縹と云ふ二縹の縹と云ふ二縹の縹と
○子母が本ありといふと云ふ葉が縹なり是を考へて
縹の縹の縹と云ふ縹と云ふ縹と云ふ縹と云ふ縹と云ふ
縹と云ふ縹と云ふ縹と云ふ縹と云ふ縹と云ふ縹と云ふ

と偏^{へん}か^こと理^りと窮^{きゆう}る^るの得^{とく}偏^{へん}か^こと理^り学^{がく}の二百五十餘日の延^{のび}
引^ひはまり^{まり}ーが今の古^こ学^{がく}の又^{また}年^{ねん}再^{さい}固^こーて英^{えい}用^{よう}令^{れい}やる
所^{ところ}のかりづー

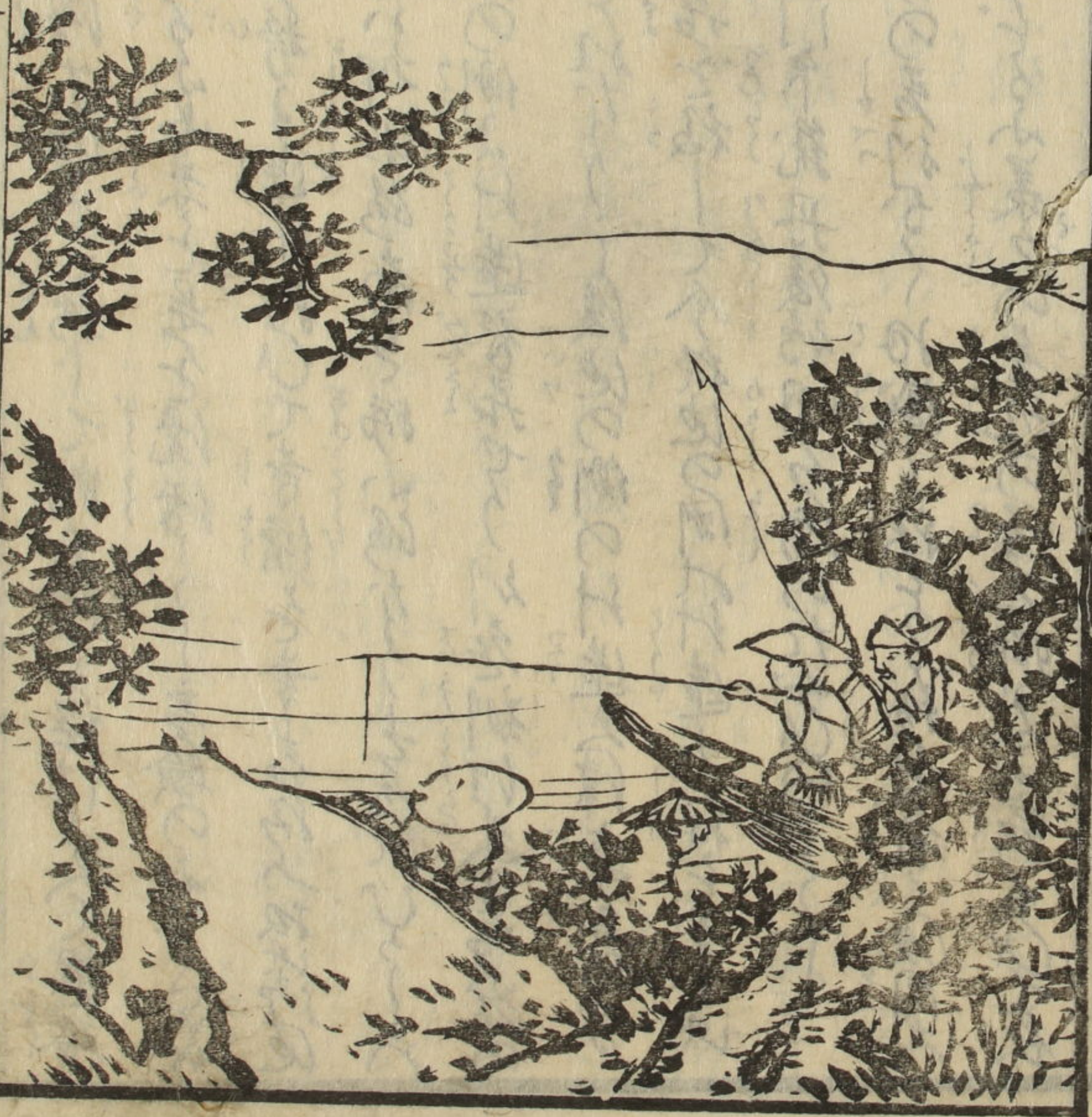
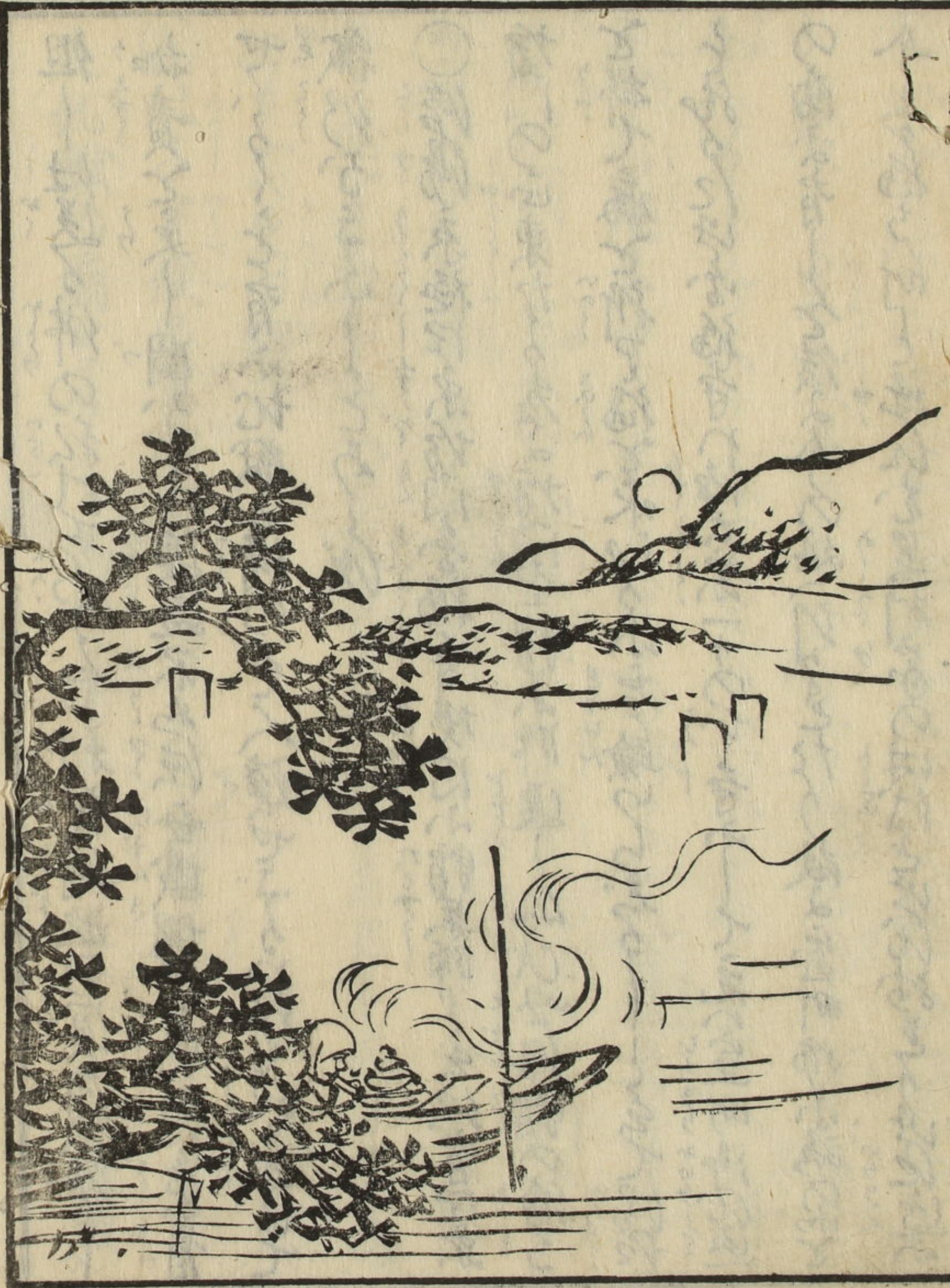
十四

○世半後といふ事は絹布厚かおの觸尺と云ふ事
 と定むる寛文五年の半かゝる當時の風より長らくと
 またりしがあらう候と云ふ事と定むる一へ元明
 天皇和銅年中の定むる寛文の制とこれ適うりしと
 寛文の制と云ふ事の人れ服法と云ふ貴長袖の所制は此
 ろるべきを短してんやと此の絹貴人の所を人の制は威
 そ一匹と云ふ事あると云ふ宛は庶民と着用と匹配匹までの
 起り云々の滑りなり

○以子方便の寓言いふ所傳ふ事此れなりしと云ふ
 先代獄の圖と云ふに娑羅王の不道を後文節の事此れ

但しは送る佛の私れありや利發僧形の冥府に墮し
 加責と云ふ圖か一近遊不戒法無懺愧る斬罪を案首
 せしむる有ふ此獄は僧のそ人墮せしむるに似せしめて
 穢けかきふしと云ふ候

○洛陽系極に東坊門系福寺境内小幡系師と云ふ有に東
 坊門の正東なりたる坊門を幡系師通ふびと洛陽の繪と
 と掛て病と祈り福と求むるふ事驗しらるる一と云て洛陽
 と洛陽とは東福寺の海玄宗一寺の寺なりて元々室町寺の
 の南より一を後今の延引きたり故に室町寺小路の北と
 今も洛陽の所と稱ふは是利家の母は此代ゆきし地なり



○世俗貴賤の差はかくぬ減と稱する物を有るは因大
曆の起るに按する小業は、其机の後乙卯大に窮むるは衣

六千

くらぶりーる製よりなり故に面衣のねり
肩衣よりなり製れぬ実妙なり袖より等持流
考氏に服折は袴を着るをわらひーる洋服の
服折をきりーる袴は袴より着るをわらひ
しそ一向に使はれお紋下の離子この肩衣はり
着せり又陣羽織と云ふのは道服のきり
具足の間を敵に知れぬとすこれより設け
氏同小袖より服折をきり着るをわらひ
の袴せーるなり

○器の文と云板にせし書あり
道明を
これが強きと

竺土の費の方便より有僧敷の費と云ふは舟の費の
深秘より有しと述よりいふと費よりして物を
持ちよるなり然れども古に深秘と云ふは
深秘初て是し侍とく權頂深秘より有る
と云ふは後なる後なる意なりと云ふ

○和州郡の茶畏所の地名をライシヨとて郡城の東
半里半小有是旧都の羅城の跡なりと云ふ
辰の市で東九條西九條と云ふ村有は同の清水も今
よはよりライシヨハ羅城の跡におぼれ
長と旧都の跡のそととと邦内狭くして低ひに

○同七古詩代題白頭翁（白頭翁）とる中に洛陽女更惜貌
色（色）といふと小所小所の方り面貌のわづむのほれ
りたひ今よりありとて一紙に代乃
とを思ふより自己の歎息（歎息）更切なり又と對する
以邊落を長歎息（長歎息）とて一回く小所はたまたの意ハ
るつふよりかいてひて我オオ小所を思ふやとてふと
とてふと成程はるより切はて感慨深うはるやとて
劉廷芝の作いすて目かへてはるはる文集後よりと
云も実とて白氏文集から白氏長慶集の事とてと
うや清女の枕子紙と文集といふと長慶集なりとてと

文集とてより後と後とてとや何と老とありと小所と云
とて父の官より上へたはる家集なる固より然るふ
諸君と盛唐の才子とを精選の佳作とてとての書
ふりて実とて秋心なりとて今の特人原古秋人とてとてと
だ

○同楓橋の夜泊の詩に記るよ月夜島嶼寂寥更とて各
白り夜半鐘聲到客船とてとて初夢の人とて一夜と解とて
次なりとて大伴家持の詩に記るよとてとてとてとてとて
とてとて夜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
八日頃の月夜の詩に記るよ月夜島嶼寂寥更とて各

これと青雲の霜のいさふ虚をうさぐさくといふがうと
まゝにほくといふ情のいかり詩にまゝ一秋の深恨なく好
情と云ふや一物なり言ふられぬ之詩に心を感る人先
れをとて書きたりし海に詩をまゝするがうたふは
詩をいふ元来矣邦の風雅と名づくる人乃其のうは
たふと物入齒の老人が情をいふやうく又詩人の跡
をいふやうくふたつと一の首もさうばう海をいふ也
たのいふやうと詩にいふはうたふをいふ也

東牖子巻之三

